
恋の温度

つきよのこねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の温度

【Nコード】

N6745L

【作者名】

つきよのこねこ

【あらすじ】

堅物な生徒会副会長の彼氏との甘いバレンタインデーを……。

生徒会室の扉を開けると、いつもそこに彼はいた。

いつも難しい顔で、一人で生徒会室で仕事をしている、副会長。会長が人気だけで選ばれた皺寄せを、一手に引き受けちゃってる苦勞症な人。

「やっぱり、いた」

扉を開くと、今日も彼は生徒会室にいた。

「いたら、悪いか？」

資料をコピーしていた御影先輩が振り向いて言った。

一つ学年が上の御影先輩は、我が校の生徒会副会長。

生真面目だと評判の優等生の彼は、人気だけで選ばれた名ばかりの会長の代わりに生徒会を支え、運営管理をしている。

生徒会書記の友達が、人手が足りないからと手伝わされているうちに、何となく気になり出して、去年のバレンタインデーにわたしから告白した。

たぶん、ふられる。

そう思ってたのに、予想外にOKを貰ってしまい、一年。

彼女が出来ても、相変わらず、彼の放課後のスケジュールは生徒会室でお仕事。

結果、放課後は二人で生徒会室で過ごすのが定番になってしまった。

「今日も難しい顔してるね。また何かあった？」

「会長が、生徒会室の鍵を落としたそうさ。ドブ川に」

こめかみを押さえながら、御影先輩が感情のこもらない声で言う。

「そ、そうなんだ…」

「幸い、予備を俺が持っていたから問題はないが……」

キュツと引き結ぶ唇に静かな怒りを感じて、わたしは返事に困り、頬をかいた。

会長が生徒会室の鍵を落としたのって、これで二回…三回目だったけ？

寄り付かない生徒会室の鍵なんか、会長には邪魔なだけなんだろうな。

「凧子。どうせ暇だろう？手伝え」

暇……だけどさ。暇なのは、彼氏の誰かさんが構ってくれないからなんですけど。

「はいはい」

ここに来たからには手伝うつもりで来たからいいけどさ。

今日が何の日かなんて、興味ないんだろうな。

朝も昼休みも渡せなかったから、放課後まで来ちゃったけど、人氣者の彼はすでにたくさんもらってるだろうし、わたしの分がなくても気にしなさそう…。

御影先輩がまとめた資料をホチキスでとめながら、わたしはそつと溜め息をつく。

彼らしいと言っちゃえば彼らしいので、怒る気にはなれないけど

……やっぱり寂しい。

昨日、有名店の限定チョコレートを苦勞して手に入れた甲斐が……パチ……パチ……とホチキスをとめる音が静かな生徒会室に響く。やっと資料を揃えた頃には、もう西日がオレンジ色に染まっていた。

「よし。こんなもんだろう」

丁寧に重ねた資料を長机の上に置いて、御影先輩が言った。

「うん。じゃあ、帰ろうか」

鞆を置いてある椅子に手をかけようとした時。

「凧子」

御影先輩が呼んだ。目を上げて彼を見る。背中に夕日を背負う御影先輩の表情は、いつもと違って、少し躊躇っているような、憂いのある表情だった。

「何か…忘れてないか？」

「え？やり忘れたことはないと思うけど…なんか、ミスした？」

「いや、生徒会の仕事のことじゃなくて…」

「……………」

不思議そうな顔のわたしに、御影先輩はじれったそうに机を指で叩く。

「今日は……バレンタインデーだろ」

「えっ！」

御影先輩の頬がうつすらとピンク色に染まっているのを見て、わたしは驚いて彼を見つめた。

全然、興味ないんだと思ってたから、びっくり。

「あ、うん……」

まさか催促されるとは……。

意外なことに戸惑いながら、朝からスクールバッグの中にあつた赤い箱を取り出して、御影先輩に差し出した。

「……ありがとう」

伏せ目がちに、安堵したように吐息まじりに低く呟く御影先輩にドキツとする。

「……もしかして、待ってた？」

そう、尋ねると、御影先輩は呆れたようにわたしを見て、溜め息をついた。

「朝も休み時間も昼休みも一向に現れないし、ここに來てからも一向にくれる気配がないから、忘れてるのかと思ったぞ」

責めるように見られて、わたしは頬を染める。

「たくさんチョコ貰ったから、もういらないかと思って…」

「次元が違うだろ。他の女子からと凧子からでは」

そう、なんだ…？次元が違うんだ……。ちよっとっていうか…かなり嬉しい……。

「凧子」

御影先輩がわたしの腕を引き寄せ、次の瞬間、噛みつくようにキスされた。

「あんまり、ヤキモキさせるな」

ぶつきらばうな口調で言って、今度は優しくわたしの唇に唇を重ねながら、抱き寄せる。

「…チョコ、御影先輩が好きそうなやつ、頑張って並んで買ったんだよ？」

「……そうか」

柔らかくなる御影先輩の眼差しに、わたしの心はとろけた。

「だから、ちゃんと食べてね？」

わたしの気持ちごと。

もう一度、キスをねだるように瞼を閉じると、すぐに御影先輩のキスが降ってくる。

大好き。

って、気持ちが伝わるように、わたしたちは甘いキスをする。

御影先輩は真ん中がトロツとしたチョコみたい。

少しほろ苦くて、甘い……体温で溶けるチョコみたいな人。
一年前より、ずっとずっと、想いをこめて。

「御影先輩、好きです」

愛の告白をする。

だって、今日は、一年に一度のバレンタインデー！女の子から告白する日だから。

きつと、今年も、ホワイトデーにはお返しが貰えるだろう。

来月は、御影先輩から告白してよね？

悪戯っぽく笑いながら言うわたしに、

「バカ」

と、照れたように呟いて、御影先輩はおしゃべりなわたしの口を再び塞いだ。

* おしまい *

（後書き）

あとがきです。

短いお話ですが、バレンタイン創作をしました。

実はこの作品は、自サイトでは名前変換機能を使った、夢小説でした。

私にとっては、オリジナルでの初めての夢小説。

ドキドキでアップしたのを、今でも覚えています。

御影先輩の生徒会副会長って設定は、私の好み。会長より副会長キヤラが好きです。参謀って感じの、頭がいい人が好きなんですよね。私の副会長キャライメージは堅い、眼鏡、裏がありそう（笑）。黒い人は好きではないので、裏は実は素晴らしく優しいとかがいいです。

こんな、私の好みやイメージ詰め込んだ副会長設定ですが、楽しみただけなら…嬉しく思います。m（――）m

書いた後に気付いたのですが、三年生なら二月には生徒会はとつくの後輩に委ねてるはずですよね；

つじつま合わないけど、そこは気にしない方向でお願いします…（

<――>）

実はこの作品の18禁バージョン『恋の温度+』も書いています。18歳以上で興味がある方は、そちらもぜひ。

内容はHがあるかないかの違いだけで、殆ど一緒です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6745/>

恋の温度

2010年10月9日19時18分発行